

人口46万人の金沢市の約3千人が訪れ、地区外北西部、金沢港近くにある大野地区は全国でも有数のしょうゆの産地だ。町家やしょうゆ蔵が多い街並みをいかして、しょうゆ製造会社の役員らが様々なイベントを企画している。

イキイキ地域

9月6日。大野地区で開かれたイベント「こまちなみフェスタ」が「こまちなみ」とは親子連ねなどでにぎわった。町家やしょうゆ蔵を巡るツアーや地区外から飲食店が出店する催しもあった。6～7日の期間中に

約3千人が訪れ、地区外から出店した飲食店からは大野にちなんだ商品開発も検討するという声も出たという。

企画したのは「大野こまちなみ研究所」だ。もともと同地区では町家を活用したイベント「大野

金沢市大野地区



ワークショップではしょうゆの原料「もろみ」の搾りかすを使った和紙でランタンを作る（金沢市）

に連携できる。イベントごとに連携するメンバーも多くなる。

しょうゆの蔵元やクラフト作家、デザイナー、染色職人など構成は多彩だ。20～40歳代が多いのも特長。事務局長を務める金沢大学講師の小林史彦さんは「しょうゆの街として魅力を発信してい

く」と話す。

混ぜて熟成させたしょうゆの原料「もろみ」の搾りかすを使い和紙を作った。しょうゆの原料であるため、ほのかにしょうゆの香りがする。この和紙を使って地元の小学生らがランタンを作った。

膨らませた風船に和紙を貼り、風船を割ると和紙のランタンができる。明かりをとると幻想的な風景が広がる。

ワークショップでは、地区で朝顔を育てるプロジェクトも実施している。朝顔のプラントナーは、木製のしょうゆケースを利用する。

大野地区では高齢化や後継者不足などで町家やしょうゆ蔵の老朽化が進むほか、空き家も増えている。小林さんは「イベントだけにどまらない取り組みを続けることで、課題解決の機運を高めていく」と話す。

しょうゆの街若手が発信

動拠点「築百年の町家」に8～10人。メンバーはとして使っている。中核地区内でネットワークをメンバーは地区内を中心持ち、多様な団体と円滑

同研究所は、こまちなみワークショップを開いてみるのとほか、大野灯台の記念日がある11月に大豆や小麦、塩などを

街びら